

# 『悪魔の木』 上巻

## 第一章 奇妙な電話

1

まだ、梅雨時期には少し早かった。関東地方は、ここ数日、梅雨の走りを思わせる厚い雲が空を覆い時折、冷たい雨を落としていた。しかし、今日はその雲も朝から何処かに消え、暫く振りに眩しい太陽が輝いていた。春というよりは初夏を思わせるような陽気であったが、その太陽も一日の役割を終えようとするかのように、輝きを落としながら西の方に傾き出した。

傾いた太陽のなかを、肩から黒いシオルダーバッグを掛けた長身の男が、長くなつた影を引きずるように、とある研究所に続く外周道路をゆっくりと歩いていった。

男が歩いている場所は、茨城県つくば市の外れに位置する周囲をクヌギやブナの森林に覆われた静寂な場所である。林の中の研究所は、数年前に森林地帯から続く松林の一角を切り開き作られた。今でも、開発当時の名残である自然の松林が研究所の周囲を取り巻くように残されている。

男は立ち止まり松林越しに研究施設の方を見た。松林の先には灰色をしたコンクリートの塀が施設を囲っている。男は、しばらく塀を見上げていたが、やがて正門のある方向にかい歩き出した。

研究所の正門は休日のためであろうか。鉄製の重たそうな門扉もんびで閉ざされていた。男は正門横にある小さな通用口の扉を押し開き中へと入った。

通用口を跨ぐと、その横には受付を兼ねた守衛所があり、中には二人の制服を着た若い男がいた。

研究所に入ってきた男は、ここで研究職にある岸田雄一という男だった。

岸田は守衛所の中にいた制服姿の男に声を掛けると、手前に置かれていた受付用と書かれた小箱から入門票を取り出し、体を屈めてペンを走らせた。

この研究所では所員であっても、休日に研究所に入るには所定の用紙に必要事項を書き込み、入門票を提出する決まりがあるようだ。

休日の出勤の為であろう。岸田は、ノーネクタイに紺のスラックス、茶色の薄地のブレザーという軽装で入門票を書いていた。

「岸田主研しゅけん、今日は車ではないのですか？」

東間という若い警備員が守衛所の中から話しかけてきた。主研、主任研究員の略称である。岸田はこの研究所では主任研究員の立場にあるようだ。

「知り合いに、そこまで乗せてきて貰いました」

書き終えた入門票を、東間に渡しながら岸田が言った。丁寧な言い方である。

主任研究員の肩書きであれば役職としては課長か、それ以上にあたるのではなからうか。それでも若い警備員にも丁寧な言葉使いをする。そのあたりには岸田という男の人柄が、現れているのかも知れない。

「そうでしたか、お休みまで御苦労様です」

東間は岸田から渡された入門用紙を、確認すると岸田に向かい敬礼をした。岸田も軽く

手を上げて敬礼の姿をして、その場を離れた。

研究員である岸田が敬礼をした。それは少し奇妙な光景に映った。

守衛を勤める人の中には警察や、自衛隊を辞めてから守衛の職に就く人も多い。また、警備会社によっては、挨拶に敬礼を取り入れている会社もある。それからすれば、守衛に携わる人が、敬礼をするのはよく見かける。しかし、研究員や社員さんが警備員の敬礼に對して、敬礼で応じる光景は余り見かけない。普通は会釈などで応じるものだと思うのだが。

守衛所を離れた岸田は事務棟と呼ばれる三階建ての建物に入り、エレベータで執務室のある三階へと向かった。

エレベータから降りると、正面には大きな窓があった。その窓からは筑波山の山並みが見える。岸田は窓に近づくと足を止め筑波の山並みを見た。時間は既に三時半を回っている。太陽が西の方に見えていた。この時期の太陽は西に移動したとはいえ、まだ高いところにある。しかし、岸田の見ていた筑波山の山肌は、すでに紫色を帯びていた。

筑波山は別名紫峰しほうと呼ばれ朝は藍色、昼は緑、夕方は紫へと一日で何度も、その表情を

変える山として知られている。

筑波山をじっと見ている岸田の横顔は、何処か寂しげに見えた。その岸田は、やがて自席のある居室へと向かった。休日の午後である。誰も居ない、執務室はひっそりと静まり返っていた。

そんな執務室を見渡した岸田は、自分の席に座るとしばらく目を閉じ、じっとしていた。やがて静かに目を開けると、机の上に積まれた書籍の山から、一冊の文献ぶんけんを取り出し読み始めた。しかし、その手はページを捲るでもなく、長い時間が流れていった。

いつしか窓から差し込んでいた明かりも次第に細くなり、やがて部屋の中を薄暗くした。それでも岸田は、文献を開いたままの姿勢をしていた。もう、書籍の読める明るさは部屋には残っていない。岸田は開いていた文献を静かに閉じると、立ち上がり室内に照明を灯した。

急速な闇の広がり、岸田の居た研究所を覆った。それは、関東地方が梅雨入りを間近に控えた六月四日、土曜日の夜の事であった。

岸田が窓から見ていた筑波山は、茨城県つくば市北端に位置する標高八七七メートルに

過ぎない山であるが、播<sup>す</sup>り鉢<sup>はち</sup>を逆さに置いたような形状をした山であるため、平坦な関東平野にあつては、ひときわ目立つ。天氣が良ければ、県内だけではなく隣接県や東京都内の高層ビル群などからも、その姿が見られる。

日本百名山の一つに数えられる山であるが、百名山の中では標高が一番低い。しかし、その山容の美しさから、古くから名峰として東に筑波、西に富士とも言われ万葉集や古今和歌集などにも筑波山を詠んだ歌が残されていた。古くは信仰の山として崇められてきたが、現在は中腹に筑波パープルラインと呼ばれる観光道路なども整備され、茨城県では中心的な観光地の一つになっている。

## 2

相馬<sup>そとう</sup>祐介<sup>ゆうすけ</sup>の住む旧八郷<sup>やさとまち</sup>町は、平成十七年の市町合併により石岡市と合併となり、現在は石岡市八郷と呼ばれるようになった。旧八郷町は筑波山の山裾に位置した町で、三方を山々に囲まれた八郷盆地と呼ばれる地区である。祐介の家は旧八郷町西端、筑波山の南斜面の僅かに奥まった場所に位置していた。

祐介は、ここから数十分を通える石岡市にある機械製造会社で、電気設計の仕事をしている三十二歳になる青年である。両親は、果樹園や稲作を営む農家をしている。祐介は、ここで両親と三人で暮らしていた。その両親も高齢となり休日などは農業の手伝いなどをする、何処にでもいるような青年であった。

その夜、明け方近く祐介は飼い犬、太郎の鳴き声で起こされた。いつまでも鳴く太郎を諫めるため、祐介は眠そうな目をしたまま、二階の窓から太郎をたしなめていた。怒っている様子もなく静かな声であった。その仕草からは穏やかな青年を思わせる。寝乱れた、少し長目の髪を無造作に掻き上げる様は、さすがに真夜中のため精彩を欠いた姿に映った。筑波山は二ホンヒキガエルの生息地であり、このガマは昔から四六のガマとよばれ、軟膏剤の売り方が袴に鉢巻き、片手に刀を持って”サー、サー お立ち合い、御用とお急ぎの無い方はゆっくりと聞いておいで”の口上で始まる、ガマの油売りとして知られていた地域でもあった。この時期は裏山に筑波山を抱える祐介の家では、時折、そのガマ蛙が現れたりする。

蛙は犬に吠えられても、逃げるでもなく、そのうえ動作も緩慢である。そのため太郎は

蛙を見て長い間泣く事があった。祐介が諫めても鳴き止まない太郎ではあったが、また、蛙でも出たのだらうと思うと、さほど気にもならなかった。しばらく太郎は吠えていたが、やがて泣きやんだ。祐介は、それを薄ぼんやりする意識の中で知ると再び眠りについた。

週明けの月曜日、祐介は九州博多にある川澄工業に向かっていた。休み前に川澄工業に納品した製品に、不都合が生じているとの連絡を受けたためであった。

祐介は石岡駅から朝六時三十分発の常磐線に乗るために、早朝、自宅からタクシーで石岡駅に向かった。途中、何台かの警察車両と祐介の乗ったタクシーがすれ違った。その警察車両を見ながら、祐介は交通事故でもあったのかと思ったが、それ以上の関心は示さなかった。

石岡駅六時三十分発の常磐線に乗ると羽田から飛行機を使えば、博多には昼頃には到着する。午後一番くらいに入ると先方には伝えていた。

羽田空港には九時前に着いた。長身の祐介の姿を見つけた同僚で機械設計を担当した大森が、現地で機械加工などを行う顔見知りの職工さん二人を連れて、祐介のそばにやって



きた。

大森は祐介と同期入社した男である。大森は見るからにピシツとした隙のないサラリーマンとの感じの男である。大森に比べれば祐介は、髪も長めで、それほど身なりに気を配っている様子もない。目鼻立ちにはつきりしていたが、それでも二重瞼の目尻が少し下がりに気味で、眉も薄めのためか一見、穏やかそうに見える。

大森と並ぶと間違いなく大森が、年上の上司とみえる二人であった。しかし、その大森にしても設計段階などでは祐介と激しく意見を交わす仲。まして大森は、祐介が学生の時、野球をしており、そこでも主将として活躍していたのも知っている。穏やかな表情の裏にある芯の強さは大森も知っていた。

祐介は三人に、短い挨拶をして九時発の全日空に搭乗した。

祐介達は川澄工業に午後から入ると、早々に納品した機械の点検を始めた。

すでに夜の九時になろうとしていた。あるていど原因は掴めてきた。なんとか成りそうだなと大森と話していると、祐介の携帯電話が鳴った。自宅からであった。大森達に、ちっと済まないとの仕草をすると、工場の隅に祐介は歩いた。

「お袋、どうしたんだ？　こんな時間に」

「それが、おかしいんだよ。お前、車庫の裏に何か植えなかったか？」

「車庫の裏って、生け垣まで二メートル位の空いた場所の事か？」

「そう、なんか大きな木が生えているんだけど」

「あんな所に俺は何も植えないよ」

「なんだろうね……大きな木が伸びているんだよ。その木は昨日までは、父さんは無かったと言っし」

「……木の大きさは、どのくらいあるの」

「車庫の屋根の高さより高い、今は車庫の屋根越しに見えているよ」

「……どんな形をしている？」

「なんか、たくさん節を持ったおかしな木なんだよ」

「木に節があるのか？　ここにそんな木はない。……葉の形は？」

「里芋のような大きな緑色をしたものが、たくさん付いている」

そんな木は祐介も知らなかった。まして祐介の住む八郷一帯は山の斜面等を利用した柿、

葡萄、栗、梨など果樹栽培の盛んな地域で、両親も稲作の傍ら果樹栽培もしている。樹木や植物についての知識は、普通の人よりは豊富に持っている。その両親が見た事のない木と言うのだから、珍しい木には違いないのだろう。

「今は、垣根と車庫の間に広がり、車庫の後ろは歩けないほどになっているよ」

「……生け垣の木が倒れてきたのとは違うのか？」

「そんなんじゃないよ。全く見た事のない木だし」

「……、そうか、よくわからんけど、木は一本だけか？」

「多分一本だと思うよ」

「……………」

祐介は驚くと云うより、何とも腑に落ちないとの感覚で、母親の話しを聞いていた。今日は月曜日である。土曜日の早朝、その場所の草を刈っている。そのときは何もなかった。一日、二日でそんな大きな木が育つはずはない。おそらく生け垣の木が倒れたのを勘違いしているように思えたが、それでも里芋のような葉を持つ木は無かっただけに、すぐに返事のしようがなかった。しかし、お袋達が心配している様子が、伝わってくるだけに、ど

うしたものと祐介は考えた。

「……わかった。後で健治に話して、様子を見て貰うようにするから。……それでいいかな」

健治は、祐介の実弟で近所の農家に今年の三月に婿養子に入り、そこで農業をしている。家からは近い距離に住んでいた。

母親からの電話を切ると、祐介は再び元の場所に戻った。

「相馬さん、今日は、ここまでにしますか？」

祐介を待っていたのか、祐介が戻ると川澄工業の担当者が、声を掛けてきた。

「そうですね。原因は掴めましたから明日、部品を加工して組み込んで様子をみます。たぶんそれで行けると思っています」

大森も祐介の言葉に頷いた。祐介達は周囲を片付けると、川澄工業を後にして食事に向かった。食事の途中、中座して祐介は弟の健治に電話をした。

「……………という事なんだ。とにかく、お袋達が見た事もない木に驚いている。悪いが、明日にでもちよっと家に寄って、様子を見て欲しいんだけどな」

「いいよ、どんなものか俺も一度見てみたい。朝行ってみる」

「すまん。今、俺は九州に来ている。ここでは、どうにも成らない」

「構わないよ、別に。そうだな、その木を見てから電話するけど、昼休みは電話しても大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だ」

「わかった。明日、また電話する」

「そうして貰えると助かる」

何か、狐にでも抓まれたような話である。健治に見て貰えば、それでお袋達も、安心できるだろうと思いつながら電話を切った。

3

筑波山の八郷方面を所轄とする石岡中署いしおかなかしよに、筑波山中で男が死んでいるとの通報があったのは祐介が、九州に発った、月曜日の朝の事であった。すぐに石岡中署から捜査員が向き、捜査が始められた。

遺体は、近くで農家を営む男が早朝五時半位に、山菜を探すために山に入り発見している。遺体のあった場所は祐介の家から見ると、西側に数百メートル離れた杉林の中で、その杉林の斜面下側は農耕地となっていた。男の遺体は、農耕地からは三十メートルほど、林の中に入った場所で見つかった。

男の身元は、持っていた運転免許や身分証明書からすぐに判明した。つくば市にあるしよくぶつせいたいがく植物生態学研究所の研究員で岸田雄一という男であった。

男は、胸に深い傷があったが、遺体からも遺体付近の草藪からも胸を刺した刃物などは発見されてなかった。刃物を抜いて男が投げ捨てた。林のなかでは、その刃物がすぐには見つからなかったとの可能性は否定できない。しかし、捜査員の多くは、直感的に遺体を見て自殺の可能性は低いと見ていた。

一般的に刃物を使った自殺なら、首や手首の動脈を切った失血死、あるいは腹部など刺すのが多い。心臓を狙っても、そこに肋骨があり、簡単には心臓に届かないと人は、本能的に知っているのかも知れない。まして、自殺を考えていたのなら、自ら刺した刃物を抜くような事は、あるまいと考えていた。ただ、早計に殺人との断定もできない状況から、

警察は、自殺と殺人事件の両面での捜査を始めた。

その夜、石岡中署では捜査員が戻ると、刑事課課長の西脇の元に集まり、捜査の結果が話し合われていた。

発見された遺体には運転免許証や身分証明証が残されていた為、岸田雄一に関しては今日だけでも多くの調べが進んでいた。死んでいた男は岸田雄一、年齢四十四歳、本籍静岡県、勤め先はつくば市にある植物生態学研究所の研究員であった。家族は、静岡の浜松市に自宅があり妻と二人の子供がいる。本人はつくば市にある同研究所が独身寮として借り上げた民間のアパートに入居、そこから研究所に通っていた。

岸田は胸を鋭利な刃物のようなもので刺して死んでいたが、現場付近をくまなく探しても、胸を刺した刃物の発見には至らなかった。

死亡推定時間は正式には遺体解剖後となるが、現場に赴いた鑑識員の話では死後膠着や血液の凝固状態から見て、発見より一日くらい前であろうとの話しが出ていた。同じく鑑識員の話しによれば付近からは、八つの違った足跡が採取できたと伝えられた。

岸田の死んだ時の服装は紺のスラックスに茶色の薄手のブレザー姿で、衣類や手などが

相当汚れていた。それらの事から岸田は、筑波山中をかなり長い時間、歩いたと思われた。また、岸田の手の爪には土が詰まっていた。何かを埋めるために山中に向かったのかも知れないと捜査員は語った。

岸田はバックなどの所持品は持ってなかったが、服のポケットから運転免許書、研究所の社員証、タバコ、ライター、ハンカチ、ペンライト、使った様子のある乾電池二本、それと財布が見つかっている。財布の中には十二万円ほどが残されていた。

事件現場の状況について大方の話が出た後、西脇が確認するように話した。

「今日の捜査では、刃物はでなかったか？」

「駄目でした」

松原という年配の刑事が西脇の問いに答えた。

「あの傷だと自分で、刃物を抜いて捨てるのは厳しいか？」

「そうですね、これも正式な解剖所見を見ないと断定は無理ですが、現場にきた鑑識員の話しでも、おそらく傷は心臓に達しているだろうと話していました」

「そうか、そうなると即死、自分で刃物を抜いて捨てるのは難しい」



「ええ、鑑識員の見立てに多少の違いがあっても、自ら抜くのは厳しいのかも知れませんが、  
そうかと西脇は頷いた。

「そうなるかと殺害か、しかし、犯行現場に争った様子になかったとなってる。それはどうしてだ？」

その問いに、先ほど手帳を片手に捜査結果を伝えていた、野村という若い捜査員が答え  
た。

「その事ですが現場は杉林の中です。現場は枯れた葉や草で腐葉土の状態となり、更に、  
太陽光が直接地面まで到達できないので、至って地面は柔らかい場所でした。柔らかい地  
面で人が争えば、地面に痕跡が残ります。しかし、遺体の周囲からは、それらしき目だっ  
た痕跡が、見つからないのです」

野村は、ここの刑事課に配属されて三年目の若い捜査員である。捜査員にしては髪も長  
目で、今風の青年を思わせるものがあつた。

「そうなるかと複数の足跡があつたのだろう、どこからか運ばれてきた遺体との線はないの  
か？」

「出血した血溜まり等から鑑識は、胸を刺したのは遺体発見現場と見ています。それに、これも鑑識の鑑定待ちになりますが、遺体のそばからタバコの吸い殻が一本見つかってます。銘柄は岸田のポケットの中に有った物と同じでした」

「岸田が吸ったかはDNA鑑定結果待ちとしても、仮に岸田が吸ったものなら、それまで岸田は生きていた。別の場所で殺害され運ばれたとの考えは無しになるな」

「DNA鑑定でタバコを吸ったのが岸田と判明すれば、ほぼ、間違いなく、そのような考えになります」

「そのときは周囲に複数の足跡があったとなれば逃げる間もなく、顔見知りなどにいきなり刺されたというような事になりそうか？」

「はい、それなら、その犯人が刃物を持ち去ったとも考えられます」

西脇は、少し眼鏡の奥の目を光らせ考えていた。西脇は、顔だけ見ると痩せた男に見えるが、よく見ると体格は小太り気味で決して痩せてはいない。五十を過ぎている為、頭髪はだいぶ白くはなっているが、まだふさふさとした髪を七、三分けしている。多い髪と逆三角形のような顔の作りが、痩せた風貌に見えるのかも知れない。時折、眼鏡越しに鋭い

眼差しを向ける事はあるが、普段は至って温厚な部下思いの男である。

西脇は、遺体周囲から採取された八人分の足跡が気になった。これが殺人ともなれば、一人の男を殺害するのに八人が関わった可能性がある。組織的な背景なしに、これだけの人間が集まるとは思えなかった。

「状況はわかった。ところで岸田が履いていたのは普通の皮靴だな。それに服装も、最初から山に入るのを考えての服装とは思えん」

野村が頷いた。

「財布は手つかず。十二万位か。金銭目的ではないな」

再び野村が頷いた。

「岸田の服装の汚れ、そうなることややはり岸田は長い時間、山中を歩いたようだな」

「その可能性は強いと思います。それに岸田の両手は土で汚れ、爪の間には土が詰まっています」

「転んだ際か？」

「十本の爪の間、全てに土が詰まっています」

「……何処かで、岸田は土を掘ったのか？」

「手の汚れからは、そのような事も考えられます」

なんだろうなと少し首を傾げながらも、西脇は話しを進めた。

「……岸田の仕事内容は？」

岸田の勤務先である研究所などに出向き、調べをしてきた中野という中堅の捜査員が、野村に変わり話し始めた。

岸田は砂漠に適した植物を作り出す研究をしていた。砂漠に適した植物の研究とは世界的に問題となっている乾燥地帯の砂漠化、この砂漠化を防止するため、水分の少ない砂漠でも効率的に育つ植物の開発を行っていたと研究所側では話していたと言う。また、研究所の人間によれば、特に仕事に絡んでのトラブルは聞いてないとの話であった。

「では岸田の足どりは、どうなってる」

「研究所の話しでは岸田は、金曜日までは通常通り研究所で仕事をしていたとなっています。最後に岸田の姿を見たのは、同じアパートに住む同僚で、土曜日の午前中はアパートに岸田の姿があったと言います。アパートの住民は、午後からは誰も岸田を見ていません。こ

こは研究所で借り上げたアパートなので隣人などは、全て研究所に勤める人間です」

「午後から見てない。それは岸田が外出したという事か？」

「いえ、外出する姿を見た人間は居ません。午後からは単に岸田の姿を目にしてないという証言です。部屋に居たのか、どうか、そこまでは判らないと言っていました。ただ、午後からも岸田の車はアパートの駐車場にずっと置いてあったので、部屋に居たのではないかと話す者も居ました」

研究職にある男であった。部屋に籠もって本など読み出せば、回りの人間に部屋の様子は伝わらない。車があったから、居たのだろうとの話にも頷けた。

「そうなると土曜日の午後の所在は、今のところ、はっきりしないが車は駐車場に置いてあった」

「はい、岸田の車は現在もアパートの駐車場に有ります」

一通り調査結果が告げられると、捜査員から意見が出された。

岸田の両手爪の間に土が詰まっていた。それからすれば岸田は、何かを山中に埋めるために山に入ったとも考えられる。しかし、その場合、服装が気になる。どう考えても最初

から山に入るのを意識した服装には見えない。しかも、その服装で岸田は長い時間、山中を歩いた形跡がある。それだけを見れば、何か突発的な出来事により山中に入ったとも思える。

岸田の遺体が見つかった場所の南面は、すぐ畑となっている。畑の下には道路が走っている。岸田が、ここの地形を知っていたなら、道路から畑を横切れば簡単に山中に入れた。仮に物を埋めるために山中に向かったとしても、そんな長い時間、山中を歩く必要はない。逆に何かを求めて山中に入ったとすれば、やはり服装が気にかかる。今のところなぜ、岸田が山中に向かったかは不明であった。

捜査員の最大の関心は、岸田の車がアパートの駐車場に残っていた事である。

現場付近は筑波山麓のために、そこに至る主な交通手段は通常車となるが、バスやタクシーを使ったとも考えられる。そのため警察は、この付近を走るバスやつくば市を中心としたタクシー会社なども調べたが、岸田に関する情報は今日の捜査では得られなかった。

岸田の車はアパートに残されている。そうなると、誰かの車に乗って岸田は筑波山麓まで行ったと考えるのが自然である。自殺を考えている男が、自分の車を使わずに、果たし

て誰かの車で筑波まで行くか、そう考えるとやはり、自殺の線は薄らぐ。状況的には、

これは殺人事件だろうと、そこに集まった捜査員の多くは考えていた。

西脇への報告が終わると、その夜の会議は終わった。

会議室を出た工藤は、大友と云う年輩の捜査員から声を掛けられた。

「工藤、どっちだ」

「事件でしょう」

「だな」

自殺では事件とはいわない。

「あの現場、どう感じた」

「いやな現場に成りそうですね」

そう答えた工藤は髪を短く切り幅広の顔に太い眉、大きな目が少し奥にへこんだように見えるが、それが浅黒い顔肌とマッチして、なかなか精悍な顔つきに映る。見た目は三十半ば過ぎと言っても通りそうであったが、実際の年齢は三十二歳であるようだ。課内では事件が起こると先ほど、西脇と話しをしていた野村と一緒に捜査を行っている捜査員であ

る。

工藤に声を掛けてきた大友邦夫は、中肉中背のがっちりした体格をした五十を少し過ぎた古株の刑事である。年相応に頭も薄くはなりつつあるが、ふっくらとした顔と少し垂れ気味の目が人柄を現している。性格は至って温厚で周囲からは、友さんの愛称で呼ばれている。

「工藤も、そう見るか？」

「友さんも同じですか？」

工藤は、これで殺人事件となれば現場周囲を歩いた感触では、目撃者探しは難航すると感じていた。

「目撃者でますかね」

大友も小首を傾げ、額に皺を寄せていた。場所も悪ければ、起きた日や時間帯も悪い。男が死んだのは、今のところ日曜日の明け方付近が有力と見られる。そうなると田舎町である。その時間帯に外を歩いている人は少ないうえ、現場は麓に近いといえ筑波山中、周囲に民家等はそれほどない。



「場所も悪い」

「そうですね、あの時間帯となると、おそらく目撃者を捜すのは難しいです」

大友が頷いた。

「そうなると現場に一番近い道路、この道路の検問で何か得られれば良いのですが」と工藤は言ってはみたものの、あの道路も難しいだろうと思った。

現場付近の道路は、石岡市と土浦市を結ぶ国道六号線から分かれた道が、筑波山麓を縫うようにしてつくば市に向かう。更に遺体発見現場から少し先には筑波山に登る道路がつながっている。

そのため、この道路は普段から六号国道の混雑を嫌う人や、石岡方面からつくば市に通う人の通勤路として使われている。近辺住民が使う比率に比べて圧倒的に、迂回車両や通勤車両が上回る。

衛星都市と衛星都市を結ぶ農村地帯に走る道路、一口で言えば、そのような道路である。従って休日ともなれば交通量は極端に減少する。まして休日明け方とあっては。めったに車は走らない。逆に、この時間帯に走る車があるとすれば、それは多くの場合、遠方から

筑波山に遊びに来た車になる。このような条件の道路では、犯行時間帯に合わせて交通検問を実施しても、犯行の有った日に筑波山に遊びにきていた車が、再び同じように走る可能性は低い。

そして一番の問題は、遠くからの通勤車両と観光地である筑波山に遊びにくる車を常時、見ている地元民からすれば、それらは全て見慣れない車である。走る時間にしても、観光地特有の土地柄を持つ場所だけに、夜遅くであらうと明け方近くであらうと、よほどの事が無い限りは何時に走っていても、それほど意識はしない。

4

祐介は翌日も川澄工業に居た。昼は工場の食堂を使わせて貰い昼食を取った。祐介達が工場内で昼の休憩を取っていると健治からの電話があった。

「悪かったな、それで、どうだった」

「……なんだろう。あの木は」

電話の向こうで、明らかに戸惑っている様子が伝わってきた。一瞬、祐介は不思議な感

覚に襲われた。何か自分が考えていたより、おかしな事が家の方で起きているのかと多少不安な気持ちになった。

「……兄貴、俺、あんな木、見たこと無いな……今、兄貴の家から、この電話をしてい  
る」

「朝、家に行くと言っていたが、今、家に行ったのか？」

「いや、朝もここに来た。朝、親父達と例の木を見た。親父もお袋も、昨日より一メートル位は大きくなっていると驚いていた。二人揃って同じ事を言うから、念のために、また来てみた。……間違いなく朝より大きくなっている」

「……朝より大きく成っているって、そんなはつきりわかるのか？」  
「そうだ」

祐介は電話の話しを、どう理解してよいか迷っていた。健治までが、おかしな木の存在を認め、それが、極めて速い速度で育っていると言う。電話で聞く限りに於いて、そんな成長の早い木などありようがないと思った。

「兄貴、この木は、今は五メートル位あると思う」

「……五メートルもあれば、車庫の屋根の二倍はあるぞ」

「ああ、そのくらいはある」

「昨夜、お袋達は屋根より少し高いと言っていた。その話しぶりでは、精々二、三メートルぐらいと思ったが」

「だったら、夜のために二メートル位育っているんだろうな」

「……一晩で二メートル、そんな馬鹿な」

「さっき言ったろう。朝より確実に大きくなっている。朝からは数時間しか経ってないんだぞ。この伸び方なら一晩に、二、三メートル伸びても不思議じゃない」

「健治、冗談を言ってる訳ではないだろうな？」

「こんな事で、兄貴を担いでも仕方ないだろう」

「そうか……」

「兄貴、この木は花を木の下から付けだす。木の下の方には白い花が咲いている」

車庫の裏手に、白い花を持つ木は植えてない。祐介は戸惑いながらも、これまで自分が知らない植物が、家で育てているのはたしかかなようだと感じた。

「……白い花か？」

「そう、ともかく、こんな早さで伸びる木が、周囲に増えだしたら大変だ。すぐに切らな  
いと駄目だ。花には、もう種子ができています。花も取らないとな。何処かにペール缶は無  
いか？」

「ペール缶なら、納屋のチェーンソーが置いてある近くに空いた缶が幾つもある」

「納屋だな。そこにチェーンソーもあるな」

「ある」

「わかった、そうしたら花はペール缶に入れておく。戻ったらどんなものか見て、焼き捨  
てた方がいいな」

「すまないな」

「かまわんさ、木はチェーンソーで切り飛ばし、運び出せるように細切れにして、車庫の  
裏に積んで置く。後は兄貴に任せる、それで良いだろう。それと、車庫の屋根や裏手が木  
の枝で壊された」

「屋根まで壊されたのか？」

「ああ、見事に壊されている。相当丈夫な木だな。木を切ったら、一応、屋根の応急処理はしておくから、戻ったらやり直してくれよ」

「わかった。そこまでして貰えると助かる」

「まあ、たいした事じゃないから構わないよ。それにしても奇妙な木だ。……それと話しは変わるけど、これも一応、伝えておく」

「なんだ？」

「昨日の朝、家の近くで遺体が見つかった」

「遺体？」

「ああ、警察は、はっきりとはいつてないけど、警察の様子からすると殺されたように俺には思える。今日も朝から刑事が二人、ここにきて、俺や親父達にも色々聞いて帰った」

田舎の喉かな町である。あまり事件らしい事件も起きない場所だけに、そんな事が家の近くで起きていたのには少し驚いた。健治から、その話を聞いたとき祐介は、日曜日の明け方に太郎が吠えていたのをふと思ひ出した。

「事件が起きたのは日曜日の明け方当たりか？」

「それはわからない。土、日曜日あたりで不審者を見なかったかと刑事が言っていた。兄貴、何かあったのか？」

「日曜日の明け方近く、太郎が吠えていた」

「その時、家の回り調べたのか？」

「いや、山から蛙でも這い出てきたのかと思った」

「……そうか、まあ、下手に外に出て怪我でもするより良かったかも知れないな」

「そうかも知れない」

「それでお袋達が不安がっている。だから今日は良子と兄貴の家に泊まる事にした。兄貴は心配しなくてもいい」

良子とは健治の妻の名前である。

「良ちゃんと泊まってくれるのか？」

「そうする。俺、今夜は公民館で集まりが七時から有るので、そのとき良子を、家に連れてくる。俺は九時位には戻れると思う」

「色々と済まないな」

電話の向こうで、かすかに笑い声が聞こえた。

「兄貴、貸しだからな」

「わかっているよ。秋になったら稲刈りの手伝いに行く」

祐介も、かすかに笑いながら答えた。

「それと、今日来た刑事の一人が工藤さんだった」

「工藤って、克彦か？」

「そう」

「珍しいな、それで何か言っていたか？」

「いや、なつかしそうに挨拶してくれたけど、仕事の話し以外は、なにもしなかった」

「そうか」

工藤克彦は、祐介の地元友人の一人であった。中学校から高校まで、同じ野球部で工藤がレフト、祐介がセンターを守っていた仲であったが、高校の時ある出来事を境にして、工藤と祐介は多少ぎくしゃくした関係になっていた。今では、お互い、連絡を取り合うよ



うな仲ではなかったが、それまでは家にもよく遊びに来ていたので、健治も工藤を知っていた。

電話を終えると祐介は、すぐに真顔に戻った。運が悪いと思った。たまたま、こっちに来た時に、家の周りで色々な事が起きているようだ。それでも近くに健治達が居たので良かったと、その時は思った。

## 第二章 二つの事件

### 1

健治から電話のあった火曜日も祐介は、川澄工業で製品の補修作業を夜遅くまでかけて仕上げていた。川澄工業を出たのが、夜の十一時に近い時間であったため、大森と相談し、もう一泊博多に泊まり、翌朝、川澄工業に寄り装置の状態を確認した足で、そのまま福岡空港に向かう予定を組んでいた。

翌朝、祐介が川澄工業に向かうためにホテルを出ようとしていた所へ、幼なじみである霧島亜紀子から電話が入った。

その朝、亜紀子は、おろおろしながら祐介の携帯電話の番号を回した。繋がらないとなれば大変だと思った。電話が呼び出し音に変わったときには、何かほっとするものがあった。震える手で早く出たと願いながら、強く携帯電話を握りしめていた。

「どうした？」

いつものように、短い祐介の言葉が亜紀子の携帯電話に流れてきた。

「……祐介君の家が燃えちゃった」

亜紀子が涙声になっている様子が伝わってきた。一瞬、何だと思った。

「家が燃えた、俺の家が燃えたのか！」

「……………」

「亜紀、家が火事とは何だ！」

「今し方のニュースを見て吃驚して、ともかく、祐介君のところに電話を……」

「今し方のニュース？　するといつ燃えたんだ」

「夜中」

「夜中に？　それで、お袋達の事、何か言っていたか？」

「……………」

亜紀子は、しばらく何も言わなかった。

「……私、もしかして祐介君も、火災に巻き込まれたのではないかと思って、心配で、心配で」

（俺が心配……）出張で博多に来ているのは、亜紀子には話してなかった。その言葉に直感的に、誰か死んでいると思った。祐介の背筋には寒気が走った。声を絞り出すように、祐介がいった。

「誰か死んだのか？」

電話の向こうから亜紀子のすすり泣きが聞こえてきた。

「誰か死んだのか？」

「……………」

祐介の声が少し強くなった。

「亜紀！」

「……四人の人が焼け出されたって、……てつきり、私……」

噎びながら話す言葉を聞き一瞬、祐介の頭の中が真っ白になった。それでも、四人と言え、両親に健治夫婦になる。

「そんな馬鹿な！」

「……………」

「そんな、そんな事あるか……………」

「……………」

「……………親父、お袋と健治夫婦かも知れない」

電話の向こうからは、亜紀子のすすり泣きしか伝わらなかった。

「俺、今、博多にいる。ともかく、すぐ戻る」

祐介がそれだけ言うと、亜紀子が言葉に成らない言葉で返事をした。

祐介は、亜紀子との電話を切ると、すぐに自宅に電話をした。通じない。今度は健治の携帯に電話をした。通じない。何度かけ直しても駄目であった。

祐介が自宅に戻ったのは、その日の午後二時を過ぎていた。祐介の姿に、集まっていた近所の人や縁戚の人達も、ほっとした様子で祐介を向かい入れた。その中には亜紀子もいた。

近隣の人達も、当初は祐介も亡くなったものと思っていたが、亜紀子が出張先から祐介が戻ると伝えたために、祐介が戻るのを待っていた。ただ、いざ祐介が帰ってくると近所の人達も、どのような挨拶をしてよいか解らずに、口数は少なかった。

祐介は、その人達に礼を述べた。祐介の横には亜紀子が居た。しかし、その目はまだ赤い。

短い挨拶を終えた祐介は、燃えた家屋の方に虚ろな目をやりながら、周囲の人達の話しを聞いていた。それらの人達の話しで、火災の状況が判った。

僅かな時間ではあったが、それらの人と話しを終えると祐介は、警察が張った規制線のところまで歩み寄り、あらためて燃えた家の様子を見た。

景観が一変していた。本来、そこに有る筈の家がない。その場所から、今まで見えてなかった裏山が見える。一瞬、自分は、何処か知らない場所にいるのではないかとの錯覚に

陥った。しかし、そこは紛れもなく自分が産まれ育った場所であった。もう一度焼けた家跡に目を向けた。無惨である。黒く変色した一部の壁を残し家の大半は焼け瓦礫と化していた。残った柱が奇妙な形どころどころに立っている。別棟になっている車庫、納屋なども屋根は落ちている。その光景に祐介は妙な違和感を覚えた。

祐介は、数年前までは地元の消防団に属していた為に、これまでに何度か火災の現場を見ている。消火が遅れば周りの建てものに延焼はする。しかし、自宅は農家である。敷地は広い、その広い敷地に物置や納屋などいくつもの建物が点在して建てられていた。その建物の全ての屋根が落ちている。春先の強烈な季節風が吹くような時に起きた火事であれば、このように燃えたとしても納得はできる。しかし、近所の人の話では、昨夜は風などない静かな夜だったと言う。なぜ、これほど激しい燃え方をしたのか不思議であった。しかも、よく見ると火災の跡は敷地の周囲の林にまで及んでいる。ただの火災にしては燃え方があまりに激しいと感じた。

規制線の内側では消防署職員や制服の警官などが行き交っていた。祐介は規制線の近くに来た消防署員に、この家の者であると伝えると、その職員から現場質問調書を作るため

の協力を求められた。その時であった。たぶん消防署員と話す祐介の姿を見つけたのであろう。二人の背広姿の男が近づいてきた。

一人の男が、何も言わずに祐介の肩をそっと叩いた。振り向いた祐介が、「来ていたのか」と言うと、男は、やりきれない様子で小さく頷くと「……、後でな」とぼそつと言うとその場から離れた。

祐介の肩に手を置いた男は、石岡中署の工藤であった。工藤が、祐介のそばを離れると、祐介はしばらく消防署員から色々と聞かれた。それに祐介は答えていた。

やがて、それが終わると、消防署員は工藤達に声を掛けた。再び工藤が祐介の側にやってきた。

「どうして、こんな事になってしまったのか……」

眉間に皺を寄せながら、やりようのない顔で工藤が祐介に話しかけた。祐介も暗い表情のまま頭を二度、三度振った。

「済まないが、俺も警官だ。ここからは警察の仕事になる。いいな」

「わかっている」

既に工藤は朝のうちに亜紀子という娘から、祐介が出張先から戻ると知らされていた。

祐介までが火災に巻き込まれなかった事にはほっとした。しかし、工藤は昨日の朝、この場所で元気な姿をした健治や祐介の両親を見ている。それだけに惨たらしい姿で火災現場から運び出された家族の姿には、何とも遣り切れないものを感じていた。

警察は焼死した人物が、祐介の両親と弟夫婦であろうと、その娘から聞くと、健治の家などに出向き確認などをしていった。

祐介は工藤から、遺体の損傷が激しく身元特定が困難な状況や死亡原因を特定する必要から、遺体は行政解剖のできるつくば市の病院に運ばれたと告げられた。監察医制度の整っていない茨城県に於いては、遺体解剖には原則、家族の同意を必要とする承諾解剖になる。工藤は辛くとも、その話をして祐介から同意を得た。

「遺体の損傷が酷い、確認は後にするか？」

遺体の損傷が激しいため、祐介が見ても確認は無理だと思った。解剖が終わって少しでも綺麗になってからの遺体を、祐介には見せたいと思った。しかし、祐介が、すぐにも家族に会いたいとの思いがあるのを知り、病院に行く事にした。



祐介は、それを集まってくれていた人達や亜紀子に告げ、野村の運転する車で、筑波南原大学病院に向かった。

そのころになると祐介は、あれは放火だと確信をしていた。心当たりは全くない。それは、ほそぼそと田舎で暮らしてきた両親も同じであろう。単なる火災では、あそこまで燃えはしない。集まっていた人達からも、家の周囲から油成分が出たような話しを、消防署員同士がしていたと聞かされた。

何故、燃やされたのか、理由は判らないが、無性に腹立たしく思えた。しかし、その腹立たしさは、やがて自分自身へと向けられた。理由はどうであれ健治や良子は、自分の身代わりで死んだと思った。出張で家を空けなければ、死んだのは自分だ。自分さえ家に居れば、少なくとも弟夫婦は、昨夜泊まる事は無かった。健治に家を見てくれと頼まなければ二人は死なずに済んだ。健治夫婦に対する申し訳なさが、自らを苦しめていた。

病院の霊安室には四つの遺体を載せた台が並んでいた。その枕元には焼香台が有り、先に来た親戚や病院関係者等が、おそらく焼香をしてくれたのであろう。線香を燃やした跡

が幾つも残っていた。

工藤が遺体に手を合わせ拜むと、遺体の顔にかけられていた白い布をまくって見せてくれた。むごたらしい姿であった。髪は燃えてなくなり、皮膚は焼けて炭のように黒く変わっている。まったく生前の面影は無い、目を覆いたくなるような姿であった。

肉親でも、その外見からは誰と判断するのは難しい状態であるが、それは間違いなく健治だと祐介にはわかった。祐介の目頭から大粒の涙が流れた。苦しんだ顔だと思った。次の遺体は母親のものであった。こちらも面影はない。外見からは、それを母親とするのはいけないが、それでも見れば不思議とわかる。

その焼けた顔を見た祐介の顔に、戸惑いの色が浮かんた。おかしな事である。健治を見たとき、母親を見たときでは受けた感覚がまるで違う。その感覚が何であろうと確認するように、母の黒くなった顔を祐介はじっと見ていた。

奇妙である。猛火で焼かれた顔から、なぜか、苦しんだ様子を感じられない。いや、むしろ、何か安心したような表情にさえ感じ取ってしまう。それは、次に見た、父親と洋子の遺体からも同じ感覚が伝わってきた。

「……表情が違う」

祐介が、口の中で呟いた。祐介の顔に工藤の目が注がれた。

「祐介、今、なんて言った」

「表情が違う」

今度は、はっきりと工藤と野村に聞こえるように言った。

「祐介、表情が違うとは、なんだ」

声を掛けた工藤を、祐介はうつろな目で見た。

「三人の顔の表情が違う。苦しんだのは健治だけだ」

祐介が、誰にと云う訳でもなくぼそつと呟いた。

工藤が少し首を傾げた。工藤にしても野村にしても、死んだ人の顔は酷く灼け爛れ見るも無惨なものであった。そこから見てとれる表情は、どの顔も苦しんだようにしか見ええない。苦しんだのは健治だけとする、祐介の言葉がわからなかった。

「健治は苦しんだ。……お袋さん達の顔は、お前にはどう見えるんだ？」

訝しげに聞く工藤を、ちらりとみると再び遺体に目を注いだ。

「……安心した顔をしている」

訝しげに工藤が、祐介の魂の抜けたような横顔を見ていた。

工藤が訝しがるのも無理はない。祐介自身、同じ状況の遺体を見ながら、なぜ、二つの違う感覚に自分が支配されたのかわからなかった。

祐介は、遺体の確認を終えると顔を上に向けて強く目を閉じた。再び目頭から大粒な涙がこぼれた。得も知れぬ怒りが身体を駆け抜けた。握りしめた拳がぶるぶると小刻みに震えていた。

祐介は、静かに目を開けると用意されていた線香に火をつけて焼香を行った。工藤と野村も、祐介に続いて焼香を済まし霊安室をでた。

3

木曜日、筑波山中で発見された遺体を殺人事件と断定した警察は、石岡中署に筑波山中刺殺事件の捜査本部を設置した。

地域に置かれた警察署では、通常、限られた人員で仕事をしている。そのために、多く

の捜査員を必要とする殺人事件などの凶悪事件が発生した場合は、犯罪の起きた所轄署に、県警本部から捜査員が派遣されて捜査本部が立てられる。

捜査本部が立てられた場合、実質的な指揮は上部組織の県警が握る。石岡中署に置かれた捜査本部の指揮は、県警捜査二課からやってきた野田課長が取る事になった。

野田は捜査本部が立ち上がると、早々に捜査会議を開いた。捜査員から、これまで得られた情報などが、次々に説明され県警捜査員と所轄の捜査員とで情報の共有が行われた。

筑波山中刺殺事件に関する一通りの報告などが終わると、野田は岸田雄一の姿が消えた、土曜の午後以降の足どり、動機の解明、目撃者の発見を三つの柱とした捜査方針を打ち出した。

本来の捜査会議はそこまでで有った。しかし、昨日、遺体発見現場の山中近くで民家火災が発生し四人が死んでいる。野田は、その事が少し気になっていた。

「西脇課長、昨日の火災について所轄で、わかっているものがあれば話してください」

「はい、では実際に火災現場に行った野村の方から捜査状況を説明します」

殺人事件の有った場所から、すぐ近くで起きた火災、それも油が使われている。

所轄は人員に限りがあるために、殺人事件を抱えながらも、火災現場には工藤や大友達も調べに行っていた。県警からも火災現場に応援はあったが、それでも、殺人事件を追っていた野田のところまで詳しい情報は入ってない。

とはいえ、これが単なる失火ではなく放火殺人と断定されれば県警は石岡中署に、この件でも捜査本部を設置する事になる。仮に近くで起きた殺人事件との関連が疑われれば、一つの捜査本部になる。野田としても無関心ではいられなかった。

野村が、手帳を片手に話しをはじめた。

「焼死したのは、今のところ同家に住む相馬雄一七十六歳、その妻春江七十四歳、夫婦の二男で近くに住む横山健治三十歳、その妻横山良子二十八歳と見られます」

「確定はしてないのですか？」

「昨日、この長男に身元確認をして貰っています。この男がいうには間違いないとの話ですが、なにぶん遺体の損傷が激しいので、最終的な判断は、DNAや歯の治療後などの照会をした後でないと確定はできません」

「現状は、その四人と見て調べを進めているのですね」

「はい」

「近くに住む二男となると、この夫婦は二人暮らしですか？」

「いえ、違います。長男祐介という三十二歳の息子と三人暮らしです」

「長男は、火災時には居なかった」

「はい、火災発生時は、九州に出張中で、知らせを聞き昨日二時過ぎに出張先から火災現場に戻ってきました」

「すると、長男の出張中に泊まりにきていた次男夫婦が災難にあった」

「そうです」

「この二人は、たまたま泊まりに来ていた？」

「いえ、そうではないです。ご存じのように、この家は月曜日に、刺殺死体が発見された場所の近くです。その為に両親が不安がっていたので、弟夫婦が泊まる事になったと戻った長男が話しています」

「そうですか、長男の出張はいつからですか？」

「月曜日からで、早朝には家を出ています」

「現場から油成分が出ていると聞いていますが、この点は」

「はい、消防の調べによれば、家の周囲など多数の場所で油成分が検出されています」

「燃え方はどのようなものでしたか？」

「はい、屋根のある建物という建物は、屋根が焼け落ちていきます。そこからみても単なる延焼でなく、油が使われた為に燃え広がったと見ています。延焼範囲は、敷地を取り囲むように林の一部に広がっています。ここにも油が使われていた様子です。また、おかしな事に、この家の南面は畑なのですが、この畑の土も油によって焼かれた形跡があります」

野田も、さすがに、その尋常とは思えない油の使い方に関心をもちました。

「家族の人間関係は」

「焼死したと思われる四人については、これまでの調べでは特に人から恨みを買うような話しは出ていません」

「焼死した中の誰かが、火を付けたとは考え難いですか？」

「それも難しいです。まず両親ですが、二人とも年金が有り、その他に果樹の栽培をしています。他に大きな水田や畑も持っています。これらは、亡くなったと見られる弟の健治



が任されてやっていたと聞いています。そこからして経済的には何も問題は無かったと言えます。また、二人とも健康を害していたとの話もありません。家族関係も周りの話しでは、極普通の家族だといえます」

「死んだ弟夫婦は？」

「こちらに関しても、まだ新婚三ヶ月位で夫婦仲もよく、これといった自殺をするような原因は出ていません。それと、弟健治は火災の前日、兄祐介と電話でやり取りしていたらしいのですが、その時も別段変わった様子は無かったと言います」

「そうですか、病院の方はどうなってますか？」

病院というのは、行政解剖に回された大学病院を指して、野田が言った言葉であった。「解剖は昨日夕刻から一体について開始されました。今朝、病院から最初の一体について、被害者の気管から煤が検出されたと聞いています。また、同時に体内からは睡眠薬成分が検出されたとの連絡を受けています」

野村の言葉に野田が、

「睡眠薬？　そして気管から煤が出た。……となると解剖の終わった一体は火災が起こる

までは生きていた」

周りにいた捜査員が頷いた。

火災で気管から煤が検出されるのは、火災が起きた時、その人物が呼吸をしていたために煤が口から気管に入る。すなわち、その人間は火災が起きたときには生きていた証明になる。たとえ無理心中であろうと人が承諾なく殺されれば、警察での扱いは殺人になる。そうになると、すでに、この火災で四人が死んでいる。まして、周囲から油の成分が出ているとなれば、いずれ、こちらも捜査本部がたてられると野田は思った。

野田が続けた。

「野村君、遺体解剖は、いつ頃に終わりそうですか？」

「病院の方では、四体あるので数日のうちと言っていました。なにぶん解剖は時間のかかる仕事ですから、はっきりとは」

「そうですか、わかりました。火災原因や動機は今のところ出てないとはいえ、遺体から睡眠薬が出たとすると、穏やかでは有りません。慎重な捜査をお願いします」

石岡中署の捜査員は神妙な面持ちで、それぞれの考えを頭の中でまとめようとしていた。

「……筑波山中の殺害事件との関連で何か、気づいた事は有りませんか？」

最後に野田が石岡中署の捜査員を見回しながら尋ねた。

石岡中署の捜査員からの発言はなかった。

野田は一つ頷き了承した。

「今のところ、昨日、八郷で起きた火災が、今回の岸田殺害と結びつきを持つか、どうかは分かりませんが捜査にあたる場合、この事も留意しておいてください」

捜査会議が終わると、捜査員達は捜査のために散っていった。

署を出ようとしていた大友が西脇に呼び止められた。

「友さん、少しいいか」

大友が頷くと、

「友さん、どのように思う」

勿論、大友は西脇が、今回の火災について聞いてきたのはわかった。

大友に対する西脇の信頼は厚い。これまでも、捜査初期段階などで無用な先入観を捜査員が持つのを嫌うような場合は、こうして大友だけと話すのも多かった。大友も、それを

心得っていたので、西脇と話す場合は、自分の思いを直に伝えていた。

「今回の火災は、放火殺人まで考えておく必要があるかも知れません……」

「放火殺人になるか？」

「個人的には七、三で外部犯と見ています」

「七割が外部か？」

「会議の中で出たように、あの民家の南面は畑ですが、残る三方は山が家近くまで迫っています。その山の中まで油で焼くというだけでも、奇妙なのに南面の畑も焼かれています。何とも、この意味が判らない。仮に恨みからの犯行としても、畑を焼く。ここがどうにも分かりません。現場を見た第一印象だけ言えば、周囲を焼くのが目的の火災のように思えてなりません」

「本当の目的は周囲を焼くのにあつたと、友さんはみているんだな」

「現場を見た印象では、そこまでの強い意思がないと、あの火災現場は成立しないような気がします」

「よくあるような証拠隠滅を狙った放火ではなくか？」

「それも考えましたが証拠隠滅のために、あれほど広い範囲を焼く必要があったかとなると、なかなか納得できません」

「それほど現場は、おかしな状態なのか？」

「私には、そのように考えたのですが、しかし、家人から睡眠薬が出たととなると、多少見方を変えないと駄目かなとも思います」

西脇が頷いた。

二人が、その様な話しをしているとき、西脇の携帯電話が鳴った。それは工藤からのものであった。

電話を終えた西脇が大友に言った。

「工藤からだった。有馬祐介が、工藤の携帯電話に連絡を入れてきた」

「有馬が？」

「焼死した自宅の犬について、調べて欲しいと言ってるそうだ」

「飼い犬をですか？」

「有馬が言うには、犯人が油をまいたのなら、そのとき必ず犬は吠える。それに家の者が

気付かないのはおかしいから、犬を調べて欲しいそうだと。友さんはどう思う？」

大友は今回の火災は、単なる火災で済まないとの思いがしていただけに、もし、犬が先に殺されていたなら、外部の人間による犯行の線が強まる。犬が火災で死んだのか、別の死に方をしたかは、後々大きな判断材料になるような気がした。

「した方が良くも知れませんか」

「そうか、わかった。それは俺の方で手配しよう」

犬に限らず行政解剖は大変な作業である。現在の行政解剖制度においては、解剖医の不足や費用面など幾つもの制約があり、そこに事件性がなければなかなか解剖まで到らないのが普通であった。特に、今回の火災では一度に四遺体の解剖が必要であったため、犬の解剖までは当初、西脇も考えてなかった。

数日が過ぎた。石岡中署の捜査員は、筑波山中で起きた刺殺遺体の捜査と、その後に来た八郷民家火災の二つを抱え捜査に走り回っていた。そのあいだに八郷民家火災に関する

る行政解剖の所見や、消防署からの火災原因究明に関する資料が集まりだしたのを受け、所轄の石岡中署員による捜査会議を持った。

このとき石岡中署に届いていた死体検案書や消防署から得た火災原因調査に関する内容は、大凡、次のようなものになる。

まず四体の遺体は家の一階の居間から、全身の皮膚が炭化した状態で発見され、その外見より遺体が可成り激しい燃焼の中にあつたのがわかつている。行政解剖の結果、治療した歯形やDNA鑑定から相馬家老夫婦と近所で農業を営む次男夫婦であると断定された。

死因については解剖所見によれば、健治を除く三遺体の体内からは睡眠薬の成分が検出され、気道内からは煤が認められ血液からは一酸化炭素、ヘモグロビン、油成分などが検出された。煤や一酸化炭素などは火災の煙に含まれる成分であり、これらが体内から検出されたとなれば火災発生時には、まだ呼吸をしていた事になる。そのため、この三遺体は火災発生時までは生存しており、死因は焼死との結論になった。ところが四遺体の中で健治に関しては、まるで違った所見が述べられていた。

健治の遺体の気道内から煤等は認められず、体内からは青酸カリが検出されたとあり青

酸カリによる中毒死と結論づけられた。また鑑識の、その後の調べにより睡眠薬成分は、居間に有った電気ポットの内部からも見つかった。

消防署調査関係では灯油、あるいは石油の成分が建物室内外、敷地周辺の山林など広範囲の場所から、検出されたとなっていた。しかし、出火元については消防としては断定はできずとっていた。それでも燃え方の激しかったのは車庫付近と敷地の西側とも書かれていた。

一般に火災が起きた場合、出火場所を中心に火災が広がるために、その分、出火場所では燃焼も激しい事などから、ある程度出火場所の特定はできる。しかし、今回は大量の油が使われたために、消防署としては出火場所の特定には至らなかったようだ。

先に会議室にきていた中野達数人が資料を読んで話し合っていた。

「健治だけが、違った死に方をしている。しかも、青酸カリとは」

宇田という若い刑事が驚いたように呟いた。

「これで行くと健治も他殺ですか？」

宇田が中野に話しかけた。宇田と中野は、事件が起きると一緒に行動している間柄であ



る。中野は大友につぐ年配の捜査員であつた。

「いや、まだ、そう決めつけるには早いよ。室内のポットから睡眠薬が出たとなれば、健治の自殺という線も捨てられない」

「でも中野さん健治の気道から煤は出なかつたんです。火災前に死んでいれば、健治には火は付けられないでしょう」

「まあ煤の件だけから見ればそうなる。しかし消防では火元を断定してない。四人が発見された居間が火元とは限らない」

「火元は断定されていませんが、それでも火災前に死んだ健治に火をつけるのは無理だと思いませんか？」

「いや、油を使うと別な事が言える。油が広範囲にまかれていれば、何も最初に居間に火を付ける必要はない。火を付けるのは家の外でも良い。家の外に火をつけた場合、室内に火が回るのは時間が経ってからだ。それなら室内に戻り青酸カリを飲んで死ぬのも可能だ」

青酸カリなら大量に摂取すれば、一、二分で死に至る。室内に火災が及ぶ前に健治は息

絶え、気管に煤が残らなかつたとの考えもできるのであつた。

「周囲に油をまいて遠くに火を付ける。……油は一種のタイムマーの役割を果たしてしまうのですね」

「そうだ、それに居間にあつた電気ポットから睡眠薬が出ている。そうなると無理心中という線は可成り強いんだが……」

居間に有つた電気ポットから睡眠薬が検出された。ポットに睡眠薬を入れるのは家族なら容易にできるが、他人となると難しい。周囲にまいた油、これなども家族の者なら簡単に出来る。

中野達が、そのような話しをしている間に、捜査員が集まり資料に目を通していた。

「連日の捜査、ご苦労さま。今、見てもらったように八郷で起きた火災の資料などが届いたので、これを踏まえ捜査状況について話し合います。まず資料の方で、これまでと変わった点は健治の体内から青酸カリが出た事。次に、居間の焼けたポットからも睡眠薬がでた。そして健治以外の三人の遺体からは睡眠薬が検出されたの三点が新たにわかつた」

捜査員が、資料を読み終えたところを見計らい西脇が切りだした。

西脇の言葉を聞きながら工藤は、ふと祐介が病院の霊安室で述べた言葉を思い出し出していた。健治だけが苦しんだと祐介は言った。何処から、そのような感覚を得たのかはわからないが、結果として健治だけが青酸カリで死んでいた。その意味では祐介の言葉は当たっていた。理由はわからないが、祐介は昔から勘の鋭い男であったたと、昔の祐介を思い出していた。

課長、これでいくと、同じ現場で二通りの死に方があったとなりますね」

中野の言葉に西脇が頷いた。

「健治だけが青酸カリで死んでいるとなると、健治が三人を睡眠薬で眠らせ火をつけ、自分は青酸カリによって自殺をした。この様な状況が強そうに思いますが」

中野が話しを続けていた時、工藤が目を細め険しい表情で中野を見ていた。そのとき工藤は健治に限って絶対自分から死ぬような男ではないと、心の中で呟いていた。

捜査員の多くは、居間に有ったポットから睡眠薬が出た事により、家族による無理心中との線が強めると、睡眠薬や青酸カリの入手経路を調べれば事件は、すんなり解決できるかも知れない、その様な話しをしていた。

「まずは薬物の入手経路、もし、家人の誰かが、特に健治夫婦が購入していれば、問題は一気に解決する。引き続き薬物の入手経路と動機、これを徹底的に調べてください」  
話しが出尽くしたと見た西脇が捜査方針を示し、一同を見回した。そのとき工藤の顔が異常に強ばっているのに気付いた。

「どうした、工藤……」

その声を掛けたとき西脇の脳裏に相馬祐介という名前が浮かんた。  
じつと西脇は工藤を見ていた。

「……工藤、相馬祐介は、お前の友人か？」

工藤が小さく頷いた。

西脇の言葉で、そこに居た何人かの捜査員が相馬祐介とは、あの相馬かと言うように頷いた。

「工藤、私情は挟むなよ」

黙って、工藤が西脇の言葉に頷いた。

薬物の入手経路を求めて、石岡中署の捜査員は健治の自宅から押収したパソコンを調べたり、郵便局や運送会社なども風漬しにあたったが、何の手掛かりも得られなかった。捜査が進むに従い、焼死した家族から自殺をするような動機も、全く出てこなかった。

雲行きがおかしくなったと見た捜査員は、徹底して当日の家族の行動を調べていた。家族の行動を調べれば調べるほどに、無理心中との考えには疑問が出てきた。

当日の健治夫婦の行動は自宅近くの果樹園で、二人が夕刻六時過ぎまで働く姿を近くで草刈りをしていた農家の人が見ていた。二人が自宅を出て祐介の家に向かった時間は六時四十分位。この時間は二人が家を出る際に良子が両親に声を掛けていたので、ほぼ間違いないものであった。

健治の家と燃えた実家は、車なら十分程度の距離、実家には七時少し前についたと思われる。そこで健治は良子を降ろすと、健治はその夜、近くの公民館で村の集会があったので、そのまま公民館に向かっている。

祐介の家と、健治の向かった公民館との距離は車では五分程度。集会に集まった村人の

話により七時には、健治が公民館に居たのがわかつている。会合は九時に終わり、その時、健治は村人と一緒に公民館を出ている。

次に祐介の両親。この夫婦は既に隠居の身であり、生活の基盤は年金にある。大きな畑と田を持っているが、これらは全て近くに住む健治に任せていた。夫婦は、健康と老後の楽しみ程度の考えで、家の周囲の畑で野菜や、果樹果物栽培をしていた。その為、ほぼ日常の行動パターンも決まっていた。老夫婦の日常的な午後からの行動は雨さえ降らなければ、一時半位より農作業を始め、三時から四時位まで休息を取り、再び六時頃まで農作業するとの、繰り返しであった。

また、火災は真夜中近くに起きているが、その日の夕刻六時少し過ぎに、近所の人が回覧板を届けている。そのとき対応したのは、お袋さんであるのがわかっている。

睡眠薬の入っていた電気ポットについては、老夫婦はまず家に戻ると、そのポットのお湯を使いお茶を飲む。それが習慣である。この年代で農作業を行う老夫婦は、真夏でも余り冷たい物を飲んだりはしない。それは、息子の祐介から確認もとれている。従って当日も三時と六時位にはポットのお湯を使って、お茶を飲んだ可能性は高かった。

問題は、体内から検出された睡眠薬の成分にあった。睡眠薬からはニトラゼバムという成分が検出されている。この成分を使った睡眠薬は中間型と呼ばれるもので、服用後十分程度で眠くなるものであった。

これらの状況を踏まえて、捜査員が出払った会議室で西脇と大友が話し合っていた。

「健治が七時近くに両親の元に行ったとき、ポットに睡眠薬を入れたとすれば、三人が一緒に口にできた可能性はあるが入れるのは難しいな」

「ええ、健治は七時には公民館に行っています。この時間だと実家に立ち寄った健治には、嫁さんを車から降ろす時間位しかなかったと思います」

「そうだよな、それに七時頃では、健治が家に入ったとしても、家族が見ている前で睡眠薬をポットに入れる事になる」

「そうですね、もし、このとき健治に睡眠薬を入れる意思があれば、もっと早い時間に両親の家に行き、人が立つ機会を狙うと思いますよ」

西脇が頷いた。

「友さん、老夫婦は必ずポットのお湯を使うと考えて良いのかな？」

「それなら息子の祐介からも、確認が取れています。農作業から戻れば当然喉は渴きます。まずは水分補給のお茶、農家の人に多い習性だと思います。特に老人の場合、ジュース、コーヒーなどを飲むのは余りないでしょうから」

「常時湯の沸いた電気ポットを居間に置くくらいだとすれば、外から戻り飲んだ。――そうだな、そうなってくると両親は、三時にもポットを使っている」

「ええ、ただ、そのとき睡眠薬がポットに無かったのもたしかでしょう」

「次が農作業を終える夕刻六時以降……」

「仮に六時頃に老夫婦が睡眠薬を飲んだとしても、回覧板を届けられた時点では、睡眠薬は効いてないかも知れないですね」

「それは、あるだろう。しかし、そうなった場合の問題は、七時頃に良子や健治が来ている。二人が来た時、両親は睡眠薬で眠っていた事になる」

「まあ、ここでは健治が家に入ったかどうかは考えないとし、問題は、そのときの良子ですか？」



「両親が寝込んでいたら、良子は訪問を知らせるために起こすかな……」

「今の時期は一年でも昼が長い時期です。七時とはいえ、まだ外は明るさの残る時間。いくら高齢だといっても、外の明るい時間から寝ていれば起こすとは思いません。その場合、起こしても起きないとなれば、良子としても心配になるでしょうね」

「友さん、そうなると六時頃に睡眠薬を飲んだというのも、怪しくはありませんか？」

「その辺が、よく判りません。まあ、疲れて寝ていると思い、良子が起こさなかった。そのような考えもできます」

「難しいな、その辺は、それよりも両親は毎日、六時には家に入るのでですか？ たまたまその日は回覧版を受け取った後も、農作業を続けていたというような事は？」

「老夫婦は近くの防災無線が奏でる六時のチャイムを聞くと、それを合図に、いつでも家に戻るそうです。それを知っていた近所の人が、六時を少し過ぎたときに回覧を届けに行ったと言いますから、あの日も六時のチャイムで家に入ったと見て良いと思います」

「友さん、健治夫婦の共謀、この線はどうだろう」

「無いとは言えませんが、それも厳しいのかも知れません」

「なぜですか？」

「心理的なものです」

「心理ですか？」

「その日、自殺を考えている人間が、村の集まりに出ますかね。そこに一つ目の疑問があります。次に、二人が共謀となると、健治夫婦には信頼関係、言い換えれば愛情が有った事になります。その二人が、方や睡眠薬を飲んでの焼死、方や青酸カリを飲んでの死、別々な死に方をしますかね」

「そうだな、お互いを信頼して一緒に死ぬと決めていれば、この場合なら良子は両親だけを眠らせて、健治の帰りを待つ。……おそらく待つな、そして二人揃って青酸カリを飲む」

「普通なら、そうなると思います。それに二人は、まだ新婚三ヶ月位、相当大きな問題でも無ければ、とても自ら死を考えるような時期とも思えません」

「そうですね、そうなるとやはり、外部の人間による犯行。——六時以降は家人が家の中にいるので無理。だとすると六時前か？」

「ええ、六時前なら可能性はありそうです。夕方近くは、この時期は蚊が多くなる事から、あの夫婦は蚊を避けるためにビニールハウス内での作業を、中心にしていたと周りの人が話しています。当日も老夫婦が、ビニールハウスの中で何かしていれば、家に忍び込めたかも知れません」

「しかし、あの家には解剖に回した飼い犬が居た。犬が吠えるだろう」

「犬は居ましたが、どうでしょう。近所の方が回覧板を持ってきても犬が吠える。郵便配達員などが来て犬が吠える。農家をやっているような田舎の人は、夜間ならともかく、日中に犬が鳴いたからといって、農作業を中止していちいち家に戻ったりしますかね」

「そうになると、外部の人間の線は消せないな。ただ、こちらも混入できる時間となると六時までが限界。三十分くらいで大きく薬では、やはり良子までが両親と一緒に睡眠薬を飲んだのは少々疑問だけど、案外、こちらの考え過ぎという事もある。しばらくは家族、外部犯、両面での捜査だな」

大友達も西脇の言葉に頷いた。

祐介の家の火災から一週間余りが過ぎていた。

その間に何度も、祐介は警察の訪問を受けていた。勿論、警察は家族に対する疑惑を直接述べたりはしないが、その態度から、明らかに家族を疑いの目で見ているのは感じられた。祐介は時には苛立ちを隠せずに、声を荒らげる事もあった。

同じ頃、警察は火災の通報者である緒方康夫という男を探しだし、その男の協力を得て火災についての実況検分をしていた。

緒方が日常的に使っていた通勤道路は、祐介の家の前を走りつくば市に向かう道路であった。その道路から祐介の家は直線では百メートルと離れてない。祐介の家は、三方を山に囲まれ、筑波山の麓に位置する小高い場所に建っていた。道路は南側の開けた平地側を筑波山の麓を這うように走る。そのため山の斜面にある祐介の家は道路からも良く見える。男は、その日は仕事で手間取り、会社を出たのが十二時位、現場付近には十二時半位に着いたという。そのとき火の手が家の西側付近から出ていたとの事であった。その男の話によれば、赤々と照らされる家の輪郭が見えたというから、その時点では、まだ家屋に

火は回ってなかったと思われる。消防署に電話連絡をしている間に、火は、あつというまに家屋などに燃え広がった様だと語った。男の証言から火災発生時間は十二時半前後であり、現場から検出された油成分が延焼に大きな役割を果たしていた事、そして、出火場所が家の西側付近であったのがはつきりしてきた。

その話しを聞いたとき工藤は、前に起きた岸田殺害現場を思い出していた。

岸田は、火災の有った祐介の家から西側方向に数百メートル入った山中で死んでいた。火の手が上がったのも同じ西側、単なる偶然の一致とは思えなかった。岸田殺害には複数の人間が絡んでいる可能性がある。火災についても複数の人間が関われば、色々な細工が出来るのではないかと考えた。

「なあ、野村、俺はなんとしても健治の容疑を晴らしたい」

火災の捜査が始まってから、工藤が始めて心の内を野村に話した。

野村と工藤は事件が起きれば、いつも一緒に行動する、いわば相棒。野村には工藤という男の性格はわかっていた。工藤は、あまり感情を表に出す男ではないが、曲がった事が嫌いで無骨な一面を持つ。自分が納得するまでは、何度でも現場に足を運ぶ。捜査には人

一倍忠実な男だと野村は見ていた。

その普段は、あまり感情を表に出さない工藤が、捜査会議の席では口を真一文字に結び険しい顔で、捜査員の話しを聞く姿に野村は気づいていた。捜査で野村と二人だけになっても、これまで工藤は友人の家族を援護するような発言もしなければ、愚痴をこぼすでもなく、黙々と捜査を続けてきた。私情や感情に流されまいとする工藤の気持ちが、一緒に居れば厭でも野村にはわかっていた。

「工藤さんは、何か調べたいものがあるのですか？」

「火災通報をした緒方さんの話しだと、火災が起きたのは深夜十二時を回ってからとなる。それなら、もう一度、公民館に集まった村人から話しを聞いてみようと思う」

「村人と火災の起きた時間に、何か関係があるのですか？」

野村の問いに工藤が頷いた。

二人は、健治が集まりを持った公民館で、当夜食事が出なかったかを調べ始めた。

田舎の風習。工藤の両親も田舎で農業をしている。公民館に行くと、時には食事や酒を飲んで帰ってくる父親の姿を何度か見っていた。工藤は、その事を思い出していた。もしか

すると健治が集まりを持ったあの夜も、公民館で酒や食事が出てなかったか、それが知りたかった。

最初は車で来ていた健治や自分達が、酒を飲んでいたとは話しながらなかった村人も、あの夜、主催者がビールや日本酒などと一緒に酒の肴と、食事としてパツク詰めの生寿司を用意していたと話した。その後、健治の隣に座った村人の話から健治は、日頃からアルコール類を口にするときは飲み終えるまで食事に手を付ける事は無く、あの夜も、生寿司を健治が食べ始めたのは、九時に近い時間であつたのがわかつた。

「野村、これで健治の亡くなった時間が割り出せる」

「健治の死んだ時間をですか？」

「ああ、検案書に胃の内容物として鮪や烏賊などが載っていた。これは健治が公民館で九時少し前に食べた物だ。食べた時間がわかれば、胃の内容物が、どのくらい消化されたかで健治の亡くなった時間が割り出せる」

「わかりました。工藤さん、解剖医の所へ行きましょう」

その言葉に工藤が頷いた。

二人は、解剖を行った病院の担当医に面会した。

健治は何もしてなかった。健治の嫌疑は晴れた。いや、健治は殺されていた。今度は、健治を殺した犯人を見つけだす。工藤の顔に強い憤りが現れていた。

工藤は、途中から西脇に電話を入れた。

「課長、健治は白です」

「何かわかったのか？」

「はい、今、南原大学病院に行ってきました。そこで健治が死んだ時間が特定できました」

「そうか」

「健治は、公民館で食事を夜九時近くにとっていました。そのとき食べた食物は、ほとんど消化されず胃に残っていました。消化状態から見ると、亡くなったのは食べてまもなくです」

「すると健治が死んだのは、家に戻った九時頃だな」



「そうなります。火災発生は真夜中ですから、健治が火をつけるのは不可能です」

「やはり、そうか」

「……何か課長の方にもありましたか？」

「少し前に、火災現場から運んだ犬の解剖結果がきた」

「何か解りましたか？」

「犬の体内からは麻酔薬の成分、ケタミンが出た」

「今度は麻酔薬ですか？ 同じ現場から三種類の薬物」

少し驚いたような工藤の声が、電話から響いた。

「一つの火災現場から薬物が三種類、滅多にあるもんじゃない」

「健治は新婚三ヶ月、それまでは両親達とあの家に住んでいましたから、飼い犬は馴れていた筈です。健治が飼い犬に麻酔を使う必要はありません」

「だろうな、健治が家に油をまくにしても犬は邪魔にはならない」

工藤からの報告を受けた石岡中署は、四人は火災を装って殺された可能性が強まったとして、放火殺人事件としての捜査を開始すると、県警も捜査本部を石岡中署におくのを決

めた。しかし、石岡中署には筑波山中刺殺事件の捜査本部が既に有るため、どのような体制にするか検討された。祐介の家の火災と岸田殺しの関連性はつきりはしないが、ほぼ同じ場所で同時期に発生している。聞き込みなども同一地域となる事や、所轄の捜査員も、元々、二つの事件を同時に扱っていたなどの事情もあり、県警は二つの事件を総合的に扱うとして指揮は、これまで通り野田課長が当たるとした。

岸田の遺体が筑波山中で発見されて、それほど日の経ってない時期の、植物生態学研究所での出来事である。植物生態学研究所では二人の人間が立て続けに亡くなった。一人が筑波山で殺害された岸田で、その前日には筑波山に遊びに行った秋山という岸田の部下が交通事故で亡くなっている。

植物生態学研究所の上層部は、岸田の死については、岸田が亡くなる前に研究資料の持ちだしなどをしていた事から、研究成果を海外等に持ち出そうとして、何らかのトラブルに巻き込まれたようだと言内には話していた。秋山の件は単なる事故として所員に告げら

れた。所員の中には近接した場所での、同時期の二人の死とあり、当然、不審を持つ人間もいた。ただ研究所に集まった多くの人間は、元々公務員という地位に就いていた者である。ある意味、組織を守るのを一義的に考えてきた集団。そのために表面的な繕いや体面が保てれば、深くは詮索しない習性を持っていた。二人が続けて亡くなったと聞かされても、組織としての落ち着きは保たれていた。

植物生態学研究所では、岸田が亡くなって数日後の幹部会議で、岸田のグループに居た芦川という研究員をプロジェクトリーダーに据えて、岸田のしていた研究を再開する事を決めた。

岸田の研究に関する問題が発覚したのは、芦川が岸田の後を引き継ぎ、活動を開始してからであった。芦川は最初の仕事として、これまでの研究資料を求め岸田の使っていたパソコンを起動しようとした。しかし、パスワードが要求され、それ以上進めなかった。

芦川は情報システム室で岸田が登録していたパスワードを調べ、そのパスワードを入力してみた。そのパスワードでは岸田の使っていたパソコンは受け付なかった。

（岸田さんはパソコン本体用のパスワードまで設定していた。このパスワードを情報シス

テム室に届けてないとなると、このパソコンは使えないな)

芦川は少し困ったなと思った。

一般にパソコンは二カ所でパスワードが設定できる。今、芦川が前にしている岸田のパソコンのように、パソコンのバイオスと呼ばれるパソコン本体が持つメモリーによって設定をするパスワードと、もう一つはオペレーションシステムと呼ばれる基本ソフト上で設定をするパスワードである。会社の情報システム室等が主に管理しているのは、後者のオペレーションシステム上で設定を行うパスワードである。理由は、こちらのパスワードは直接インターネット接続や社内ネットワークに影響を及ぼすために、会社として一次的な管理が必要となるためである。

(仕方ない、これじゃ、このパソコンは使えない、ハードディスクを外すか……)

芦川はハードディスクを外す事にした。元々、保存されたデータはパソコンの中でハードディスクと呼ばれる記憶装置に書き込まれている。パソコンに少し詳しい者であれば、パソコン本体にパスワードが設定され使えない状態でもハードディスクを取り外し、違うパソコンにデータ用のハードディスクとして接続すれば、データの取り出しができるのを

知っている。

芦川はパソコン本体を、机の上に持ち出すとパソコンのケースを外した。

「あっ」とパソコン内部を見た芦川の口から小さな声が漏れた。

パソコンの中にハードディスクが無い。いや、ハードディスクが外されている。

「岸田さん、やってくれたな」といった芦川の顔が曇った。

（岸田さんはデータを持ち出した？ いや違うな。持ち出しただけなら、コピーすれば良い、わざわざハードディスクを外す必要はない）

研究データは研究所の情報システム課が、管理しているホストコンピュータにも蓄積されている。それは岸田自身が一番よく知っていた筈であった。そして、ホストコンピュータ上の、データへのアクセス権を持っていたのもリーダーの岸田とサブリーダーの秋山の二人であった。

（岸田さんの事だ。これでは、おそらくホストコンピュータのデータにも手を加えているな）

芦川は情報システム室に出向き理由を話し、ホストコンピュータ内のデータの点検を依

頼した。

「芦川さん、駄目ですね。芦川さんが必要としているデータは全てパスワードが設定されています」

情報システム室の園田が端末を操作しながら、そばに立つ芦川に話した。

「なんとか、取り出せませんか？」

「……ファイルが全て暗号化されたうえに、パスワードがかけていますから、可成り厳しいと思います」

「パスワードがわからない限り、このファイルは使えない」

「そうなります。これ、仕掛けたのは岸田さんでしょう。どうも、これらのファイルは自動復元にも対応しないようですよ」

「自動復元とは？」

「一般の暗号化ソフトは、データを暗号化するさいに暗号化したデータに解読プログラムを組み込むタイプのものと、データだけを暗号化するものがあります。後者だとパスワードが分かっても、暗号化したときに使ったソフトも必要になります」

「このサーバーには暗号化用のソフトがインストールされてない？」

「ええ、これだと外部からネットワーク経由でソフトを起動して暗号化したんでしょう」

「つまりは二重に鍵を掛けている」

「打つ手はなしですか？」

「岸田さんだと、暗号化ソフトくらい自分でプログラムするですよ、それが使われていたらお手上げです」

「どうしようもないといった感じで園田が言った。」

岸田は完成間近の、あの研究を完全に封印していた。なぜ、そこまでする必要があったのか、そのときの芦川には理解できなかった。

研究データが使えない件は、すぐに研究所の幹部に報告した。

研究所幹部の怒りは激しかった。

芦川は、すぐに試験を完成させろと激憤混じる言葉で、上層部から命じられた。芦川は困ったなと思った。すぐ試験を完成させろと命じられても、多分無理だろうと思った。たしかに岸田とは同じグループで仕事はしていた。その意味で研究所幹部が試験は続けられ

ると考えるのは仕方ない。しかし、再び駄目だと芦川は思った。

芦川は飄々として、どこか掴みどころのない青年である。それでいて、相手が誰でも、言いたい事はわりと遠慮なしに言う。ある意味、上下関係の厳しい、この組織では珍しい部類の性格をしていた。そんな性格ではあるが、岸田に対しては尊敬の念を持っていた。岸田も、そのような芦川を可愛がっていた。しかし、その芦川でさえ研究が完成する間近になると、試験から遠ざけられていた。

（岸田さんは、俺達を遠ざけたときから、このような結果になるのを考えていたのかも知れないな）

だから重要な部分は岸田、秋山のラインだけで処理していたのだと芦川は思った。その二人が、時を同じくして亡くなった。

この研究所は、岸田の考えを実現させるために作られた施設であった。それは、ある意味において、岸田の研究所といっても過言ではないほどである。それを知る芦川だけに、岸田の行動には、どうにも納得できないものがあつた。

芦川は、廊下を歩きながら考えていた。



(そう言えば、太田さんと岸田さんが少し前に部屋で言い争っていた。……温厚な岸田さんにしては珍しい事だったな)

### 第三章 元防衛省技官の論文

#### 1

祐介は、警察から遺体に戻るのを待って葬儀をおこなった。

工藤と野村が葬儀に参列していた。工藤と話す機会があったが、工藤達も葬儀の席とあって遠慮があつたのだろう。事件の話はしなかつた。帰り際、工藤が落ち着いたら、改めて尋ねてくると言い残し帰っていた。

祐介は、火災の翌日には燃えた自宅から、少し離れた場所に部屋を借りていた。しばらくは急を知り駆けつけた親戚、知人の対応等々で常に部屋には人があふれていた。

葬儀が終わり祐介の部屋から、親戚達を送り出すと祐介は一人になった。これまでの張り詰めていた気持ちがあつりと切れた。そのまま部屋で仰向けになった。少し汚れた天井が目に入った。

一人だけになってしまったとの実感が襲ってきた。急に寂しさがこみ上げた。両親や健治達が、そばにしていると意識をした事はなかった。いるのが当たりまえと感じていた。その当たりまえの存在が急に目の前から去った。祐介の両目に涙が伝わった。

その数日後の夜、祐介は警察から火災現場の現場保存が終わり、立ち入り禁止が解除されたとの連絡を受けた。

翌日、祐介は燃えた実家の跡に花を供えに行った。

自分が生まれ育った家が無い。そう思いながら居間のあつた場所に行くと、そこには幾つかの花束が供えられていた。規制線のなかに入れたのは警察関係者や消防関係者、おそらくそれらの人が供えてくれたのだと思った。祐介も重ねるように、その場所に花を供えた。

目を閉じ手を合わせると家族の姿が鮮明に目に蘇った。それだけに訳の判らない怒りが祐介の全身を襲った。祐介は全身から沸き起こる怒りを、歯を食いしばり堪えた。しかし、怒りの反動は虚脱感として現れた。うなだれて立ち上がった祐介は、しばらくぼんやりと

焼けた跡を見ていた。

(……一体、ここで何が起きたのだろうか)

遠くを見る目で、火災前後の事を考え始めた。

(そうか、あの日、お袋から奇妙な木が伸びていると電話が有った)

慌ただしい葬儀などのために、すっかり、それらは脳裏の片隅に追いやられていた。祐介は、駐車場の有った裏手に足を進めた。駐車場は完全に焼け落ち柱材や屋根材などの瓦礫が、駐車場裏手の空き地まで散乱していた。

(健治は、木を切ったといった)

祐介は、健治の話しを思い起こしながら、こんもりとした瓦礫の一角に目をやった。

(健治は、片づけし易いように奇妙な植物を、チェーンソーで細かくしておくと言っていた)

祐介は、瓦礫をかき分け、その下を、のぞき込んだ。瓦礫の下には多量の灰が見えている。崩れ落ちた屋根材が燃えた灰にしては、多すぎると感じた。

——健治、ここだろう、お前が切った木を置いたのは？——

——よう、兄貴、帰ったのか、そうだよ、それは俺が切った木だよ。車庫の裏に重ねて置いた——

健治が、そう答えたように祐介には聞こえた。

祐介は、汚れるのも構わずに、更に瓦礫をかき分けた。瓦礫に隙間ができた。表面は灰が覆っている。灰をかき分けると中から木の燃え残りの様なものが姿を現した。祐介は、手を伸ばして取ろうとしたが、瓦礫が邪魔で取り出せなかった。

健治は、あの木は五メートルあると言っていた。お袋も車庫の裏一杯に広がっていると  
言っていた。表面は灰に覆われているが、その下にはかなりの燃え残りがある。それは、  
こんもりと膨らんだ瓦礫が示していた。五メートルの木が間違いなく、ここに存在してい  
たのだと思った。

帰り際、

——兄貴、俺がいて、お袋達守れなくて済まなかったな——

と言っ健治の声が聞こえた。

(馬鹿、それは俺の方だ。本当なら俺が、もう、この世には居ない。その俺が生き延びた。

もし、警察が犯人を捕まえられなかったら必ず俺が捕まえる)

——ハ、ハ、ハア、兄貴に捕まるような犯人だと、だいぶん抜けだな——

(ばかを言うな。これでも多少は、頼れる兄貴だといふところ、見せてやるよ)

——そうか、期待しているぜ——

(健治。お袋達、何か安心した顔で死んでいた。なぜだかわかるか?)

——わかるさ、そばに良子が居たからだろう——

(じゃ、良ちゃんも安心した顔で死んでいた。こっちは)

——それも、そばにお袋と親父が居たからさ——

(お前だけ、苦しい顔をしていた。なぜだ)

——さあ、わからんよ——

(お前、犯人みてるんだろう)

——どうだったかな、忘れてしまった——

(……そうか)

祐介は、健治との話しを終えると、その場を去った。

『悪魔の木』試し読みでした。

ここまでのおつきあい、ありがとうございます。